

スポーツの指導哲学に関する一考察 2 —コーチング空間の哲学的見方—

後藤太郎*

The study on the coaching philosophy 2 — philosophical aspects about the space of coaching —

by

Taro Goto

Abstract

The purpose of this paper is to consider the best approach to consider coaching. For this purpose, the research examines Tosio Kuwako's arguments that aspects such as "haichi" (disposition of the person) and "rireki" (personal history of the person) should play a role in determining which approach to use when coaching. The findings are as follows :

- (1) It is important to take these relative aspects into consideration when defining one's approach to coaching.
- (2) This approach should not be based upon an authoritarian style of coaching, but rather a more cooperative style of coaching.
- (3) That this philosophy produces a more holistic approach and thus effective approach to coaching practices.

1. はじめに

競技スポーツにかかわるコーチは、日々の練習や試合を通して選手たちと共に歩み、試合に勝利することで選手たちの成長を目指して指導しているのではないだろうか。しかしながらいつしか「選手たちのためのコーチング」という「哲学」¹⁾は忘れ去られる。何故そのようなことになるのだろうか。

久保はコーチングを「単一の概念のみでなく関連する複数の概念相互の関係として機能するもの」²⁾と述べている。それでは、競技スポーツのコーチ（指導者）の役割とは一体何があるのだろうか。具体的には、対外試合の企画運営、チーム戦略、戦術の決定、練習の運営、リクルート、私生活の管理など多岐にわたる。例えば学校教育における運動部活動の指導者ならコーチと教師という立場を行ったり来たりしながら選手（生徒）と

* 1 東海大学体育学部競技スポーツ学科

かわらなければならない。久保は以前からコーチング概念の多重性を指摘しており、難しい状況に対してコーチの役割葛藤、実践行為における矛盾の問題を提起している。コーチについて久保は『『コーチ（地位）』は『競技スポーツを教えること』の実践者として、選手に対して何らかの働きかけを期待されている社会的地位であり、その地位に就く『コーチ（人間）』には、まず競技集団内の成員（選手）に対する役割が期待されるであろう』³⁾と述べ、さらに『『コーチ（地位）』が社会的地位である以上、その役割は競争集団を取り囲む選手以外の存在、例えば選手の親や後援会の人々、あるいはファンなどに対しての役割も期待されるだろう』⁴⁾と述べる。すなわちコーチとは様々な事柄において期待された社会的地位であると言え、その多種多様な期待に答えていくためには、選手の様々な問題を感知するとともに、それをコーチング空間全体からバランスよく捉えることができる存在でなければならないということである。

久保が言うようにコーチは競技スポーツの指導者としてだけでなく、教育者、セールスマン、チームの広告塔としても期待されており、コーチング実践という次元とその現場を取り囲む社会という次元によって構成された空間において、多元的な役割を持った存在である。そこでコーチング空間の価値観は錯綜し、それぞれの価値観が対立するから問題が起こる。一般的にコーチング空間はコーチの統一した見解で認識が統一されているとは限らず、つまり実際にはどうなっているかわからない状態のまま実践は進行されている。このような状況下で多くのコーチが現場の判断に迷い、決断する選択ができず、自分の進むべき方向がなくなっている。この問題を解決するためには、コーチング空間の中で起こる関係全体を俯瞰して見ることで問題を捉えるべきではないだろうか。言い換えれば、「関係」としてかわかる対象を自分も含め、関係を相対的な状態にすることで、自分自身をもう一度見つめ直すことから問題を考える必要があるのではないだろうか。価値が変わり続ける現代のコーチング空間では人々の価値と価値がどうしても対立し特定の答えを出すことが難

しい。コーチング空間に問題が起こった時、一つの価値を無理やり押し付けて空間を成立させようとしようとするから対立は起こるのではないだろうか。

2. 研究方法

本研究は、コーチング現場で起こる諸問題の原理を捉え、考え直すことを目的としたい。そこで今回の研究ではコーチング実践を「コーチング空間」という見方でコーチの立ち位置から考察し、そこからコーチである「わたし」を問うことでコーチングを考えてみたい。研究方法は、まずコーチングを上述した久保の論を手がかりに、コーチングは複合的で相互的な行為であることから「コーチングは関係である」と定義する。そしてコーチング空間で起こる問題とかかわるコーチ自身が何に対して支配され、身動きが取れなくなっているかを考察することでコーチの在り方を再検討していく。コーチを分析する手がかりとしては、桑子敏雄の哲学に注目し、その中で「わたし」を捉える概念、「配置」と「履歴」を抽出して、あくまでも「関係」を念頭に置いた上で「わたし（コーチ）」を「配置」と「履歴」を用いて検討する。本論はこの考察にしたがって進めていくことでコーチングの新たな見方を検討することを目的とする。

3. 桑子敏雄の概念「配置」と「履歴」

桑子の「配置」とはどのような概念なのだろうか。桑子は「配置」を次のように述べている。「身体の配置とは、ひとりひとりの人間がこの地球上のある地点に空間的広がりをもって配置されている」⁵⁾。これが桑子の人間を捉える見方である。そして桑子は「配置」を具体的にこう説明をしている。「自己とモノやひととの相関の構造を示す概念である。ひとの身体はその身体と他のモノやひとびとの相関的な配置の関係にある。この配置こそ、ひとりひとり個性的な存在である」⁶⁾。つまり人間の生は空間とのかかわりにおいて個性的であり、配置された人間は空間の中で事物と相関的に存在しているということになる。これをコーチング現場に置き換えれば、コーチという存在

であるわたしの身体は一つしかないから、現場でものを見るとき、あるいは何かを聞くときは、わたしの身体からしか見えないし、聞こえない。つまり他の誰かがわたしの立場に立って同じものを見たとしても、わたしと同じものが見えているわけではなく、わたしの固有性がそこにあると言える。コーチと選手だけでコーチング空間が成り立っているのではなく、いろいろなものとわたし自身との空間的な関係が「配置」という概念である。つまり人間の生とは環境そのものであると言え、そのことを桑子は「わたしとはこの身体と身体が配置された状況との統合である」⁷⁾と述べている。したがって、いろいろなものとわたし自身との空間的な関係があってこの「配置」という概念が成り立つ。言い換えれば、わたしというコーチはこのコーチング空間の中で一つの配置を持っている。その「配置」は、そこに至るまでの過ごした環境との関係、その環境との時間的な経緯の積み重ねの到達点として存在している。だからわたしの「配置」はわたしという存在を承認する大切なものであると言え、このことから分かるように人間は身体の「配置」された場所が生根幹にあるのではないだろうか。この桑子の「配置」という概念は、時間の次元とともに理解しなければならず、人間が「配置」されているということは、その「配置」の礎となる経験、つまり「履歴」をそこで既に持っているということである。

では「履歴」とはどのような概念なのだろうか。上記でも示したように「履歴」とは人間が地球上に今、ある地点に存在するという「配置」において経験が積み重なったことであり、一人の人間が経験するためには自分の身体で経験しなければならない。例えばコーチング空間においてコーチと選手の出会いや試合での経験は、わたしの空間の配置における時間的な経験を含んだ関係の過程なのである。そして自己の履歴の積み重ねが空間の履歴となる。空間の履歴とはわたしという存在を含むものであり消去することはできず身体と不可分な関係であると言える。すなわち生きる過程において「履歴」と「配置」を切り離すことは出来ないものであり、繰り返せば「配置」とは「履歴」の積み重ねで、その積み重ねが新たな「配置」を

生み出し、それが「履歴」となる。この循環が人間の生そのものであり、人間という存在とは空間において「配置」と「履歴」にはかならないと言えよう。

4. 一元的な見方

人間の「配置」と「履歴」を考えた時、世界にたった一つしかない身体をもった一人の人間はすでに個性である。つまりそこで人間が一つの身体をもって世界に存在しているということは、ある空間的な位置を与えられているということであり、それを桑子が言う「配置」と理解していいだろう。つまりこの桑子の「配置」に対する理解は「履歴なしには自己は成立しない」⁸⁾ということであり、人間とはその「配置」において個性的な存在であると言える。「配置」を持っている個々の人間が、生きていく上で様々な経験を積んでその「履歴」が新たな「配置」を生み出し、人間が形成されるのではないだろうか。

桑子は言う。「空間の履歴のもとでわたしは自己の履歴を形成する。その履歴の全体を『わたし』と称する」⁹⁾。この引用からも分かるように、人間は「配置」と「履歴」によって経験が蓄積され考え方が培われることで一つの見方が形成されていく。そしてそれはコーチング空間に置き換えて考えても同じであり、例えばこれまでプレイしてきた選手達はそれぞれ独自の「配置」と「履歴」で今の自分自身を構築しており、関係するものとかかわったときズレが起こる。コーチング空間でのコーチと選手は集合体としての空間的な位置を「配置」として与えられており、その「配置」と「履歴」をもった者同士たちが、自分本位に空間を創ろうとするから問題は起こるのであろう。つまりその空間に「配置」された個々は新たな承認と了解を得るため、それぞれが自分の見方に合った空間を創ろうとする。例えば一人のコーチが指導をしようとするとき、空間的な存在として「配置」において社会から承認され、その経験が「履歴」となることでアイデンティティを獲得する。そこでコーチが試合に勝って成功し承認されたならば、コーチはその経験に捉われるようになる。そしてその経験によって自分を肯定する一

元化した見方を成立させていく。人間がある「履歴」をもつということは、その履歴の結果として現在の配置をもつことであり、自己の存在はその履歴そのものであって、逆に言えばわたしが配置するかぎりにおいて自らの履歴を消去することはできない。一元化した見方とは、人間の在り方として形成された身体の「配置」が自分自身としてその空間に「配置」をもつことで「履歴」し、それがわたしという存在を生きる上で肯定しようとする。つまり人は自分が肯定されるよう物事を捉えようとするが、それがどんな新しい空間の状況、関係においても、わたしの一元的な見方をつくる「配置」と「履歴」が、今のわたしを支配しようとするのである。

5. 多元的な見方

コーチング空間においてコーチは様々な立場の人間と共有してかかわって活動しており、その誰もが自分の「配置」と「履歴」において自らの意見を出そうとする。しかしながらどんなに分りやすい状況においても、個々の「履歴」と「配置」が固有である以上、物事の見方が完全に一致することはなく、どんなに統一された空間に見えてもそれぞれの立場から見れば食い違いが起こっている。同じ状況を共有して同じものを見ても、選手とコーチはモノの見え方が違うというのが自然な状態である。様々な見方が集まる多元的な空間において、コーチも選手もこれまで辿ってきた独自の「履歴」から現在この場に「配置」されているから、それぞれが固有に空間を理解して共有することになる。共有する空間において一つのことを違う次元で捉えているにもかかわらず、コーチはその空間に自分の見方だけで選手を無理やり強制してしまうことがあり、コーチという立場そのものを拘束する価値基準に支配されてしまう。しかしながらコーチング空間とはあくまでも共有する空間であり、お互いの主体性を認めて合意で創る相対的空間にしていくべきではないだろうか。コーチングという行為がコーチと選手の共働作業であるならば、状況を相対的な見方で理解し、自分の考えを押し付けるのではなく、お互いの間でできた新しい考えを導き出すことでより良いもの

にしなければならない。どんな状況であっても自分だけの立場だけに固執してしまえば、現場の思考を硬直化させ、より良い方向へ先導することはできない。コーチング空間における多く場合、コーチがその立場においてコーチング空間を支配し固定させてしまうのである。この問いに対して桑子は次のように述べている。

「相手の立場に立って考えること、立場を離れて物事を見ること、立場を超えて話し合うことの意味は、『配置と履歴』から『立場』を分離することによって理解することができる。言い換えれば、立場を離れること、自分の立場を拘束する行為規範や価値規範から離れることで、対立する相手の行為規範や価値規範の意味について理解しようと試みることができる」¹⁰⁾。

これをコーチング空間に言い換えれば、コーチや選手がお互いの立場に立つということは、自分を絶対化するのではなく、相対化させて客観的に選手の視野からも見える世界というものを知ることであり、そこから自分自身を見ることで空間全体の中にいるわたしを見るということである。相対化したものの見方とは、多元的な見方ができるということであり、自らの「配置」と「履歴」に支配されることなく相手の「配置」と「履歴」と自らを相対化させて第三の新しい目で自分たちが創る空間を見るということは、すなわち自らの立場を置いて理解するということである。相手を理解するために自分の「配置」と「履歴」から「立場」を切り離すという桑子の見方は、コーチング空間そのものを捉える一つのヒントになり得るのではないだろうか。

6. コーチングの新たな視点

コーチング空間においてコーチングする環境、コーチの能力、選手の資質などによりコーチングの方法はそれぞれ状況で異なるだろう。何を選択したとしてもその方法が選手のためのコーチングをするという考えに基づいたものでなければならぬのではないだろうか。みんなの思いが集まる多元的な空間を共有しなければならないコーチン

グ空間が共通の認識で作動しているかどうかを見ることがコーチの役割であり、実践において対立したとき、みんながこの原点に立ち返ることが重要なのではないだろうか。しかしながら実際の現場において自らの配置と履歴に支配される状況でこのような指導実践をすることは決して簡単ではない。この問いに対してここで桑子の論を引用したい。

「自分の立場から離れて価値判断できるということは、価値判断の複数性を承認することである。合意形成とは複数の対立する価値判断をもちながらも、ある事柄に対して合意に達することである」¹¹⁾。

つまりここで考えなければならないのは、そもそもコーチがコーチング空間の価値観を支配しなければいけないのかという問いである。このときの複数性の承認とは空間のあらゆる価値観を一つに統合するという弁証法的な解決を目指すのではない。ここで桑子は「合意形成とは、多様な価値観を共存させながら合意することである。それぞれの立場は立場として、利害を超える第三の選択肢を見いださなくてはならない」¹²⁾と述べる。桑子が言うこの提案型の思考とは複数の価値観を平等に相対的に見ることであり、複数の価値観が存在する空間を認めるということは、どちらかがどちらかに従うのではなくお互いがお互いを認めた上で、どう合意して新しいものに創るかということである。コーチング空間でも、勝利を追求する実質的なプレイの価値と、華やかで楽しむプレイというそれぞれ異なった価値があるが、コーチはこのような複数の価値観を相対的に見ることで共有する空間に新たな方向を見つけて提案し、あくまでも選手自身が主体的にその方向を認識できるような空間を目指してしていくべきではないだろうか。さらに桑子は合意形成を次のように述べている。

「提案型の思考とは、与えられた問題に対し、複数の選択肢を用意できる柔軟さをもつ問題対応のシステムティックな思惟方式である」¹³⁾。

桑子の言う提案型の思考を言い換えれば、コーチが目的に向かう方向において支配した電車のレールの上を走らせるのではなく、幅をもった道を準備することで選手は主体性に走ることができ、その柔軟性のある道は同時に自らの責任を導き出すということになるのではないだろうか。共に創ることということは自分と相手が自由と責任を共有することであり、それぞれの主体性をもった責任が実存において支配ではなく自ら創り上げる具体的な活動になっていくのではないだろうか。つまりコーチング空間を創造させる思考とは、自分（配置と履歴）の価値観を踏まえた上で空間にある多様な価値観を感知し、それらを相対的な関係として捉えた上で状況に合わせた価値を選択していくということなのではないだろうか。

7. 結語

価値観の多様化した現代においてコーチたちは誰もが自分なりの価値観をもってコーチングしている。日々の指導において自由を尊重することと、好きにやらせるだけでは間違った方向に進むかもしれないという葛藤を併せ持っている。選手を褒めるべきか、それとも叱るべきか、ゆとりをもって指導するか、知識を詰め込むか、エリート教育か、みんな平等にやるべきか、コーチの葛藤はこれらの行為に対して選手たちだけではなく社会、組織、父兄、エートスなど様々なかかわりにおいて他者からの承認を受ける。これらの行為における一つの達成は一つの問題の始まりであり、コーチの価値判断が集団の価値として纏まっているように見えても、実際には誰かの我慢や犠牲によって成り立っているのが現実の実践現場ではないだろうか。そこで誰もが認める価値空間に近づくためには、そこに「配置」された「履歴」を持つ者たちが、かかわりとして創る空間において、それぞれが自分の立場からだけで主張するのではなく、自分の立場を置いて、お互いが関係において本質的には自由な存在であることをまずは一旦認め合うことが重要なのではないだろうか。同じ空間にいる選手たちもわたし（コーチ）と同じように自由に生きたいと望んでいるはずである。しかしながら、共有する空間において何も無しに「全て自由」と

いう指導では空間はバラバラになってしまい、そこでコーチの役割は先導役として求められることになる。そのようなコーチング空間における立場の違いの中で多様な価値を相対的に見たとしても、みんなが共通して理解できる認識は、空間の中にある「哲学」、すなわち何のためにスポーツをしているのかというところに戻っていかなければならないのではないだろうか。

本研究はコーチング空間の関係を桑子の「配置」と「履歴」という概念を手がかりにコーチの立場から見方を検討してきた。コーチング空間におけるコーチという配置はその人の人生の履歴においてつくられたものであるから、簡単に捨て去ることはできない。対立し、意見がぶつかり合うのは、自分の立場に固執し自分の立場を絶対化してしまうからなのではないだろうか。けれども自分の背景にある「配置」と「履歴」を自分の立っている立場から区別することができれば自分を絶対化しないで物事を考えることはできる。学校の運動部活動においてコーチでありながら教師として、選手同士でありながら先輩と後輩の上下関係など、誰もが固有に「配置」と「履歴」、そして複数の複雑な立場から物事を見ている。どうしてもそれぞれが自分の「配置」と「履歴」を踏まえた立場から物事を見てしまい、いつしかコーチングという関係の空間において「哲学」は忘れられてしまうのである。コーチング空間にどんなプレッシャーが懸ろうとも「選手たちのためのコーチング」という「哲学」があれば、わたしは自らの「配置」と「履歴」に支配されることなく、この複雑に満ちたコーチング空間を合意形成という形で調和し創造できるのではないだろうか。すなわち、これからのコーチング空間において差異を乗り越えた関係の価値を考えることが重要な見方になると思われる。

引用・参考文献

- 1) ここでいう「哲学」とはコーチングをプロセスとして考えた久保正秋のコーチング回路¹⁴⁾における「哲学」である。このコーチング回路(図1)は「哲学」-「計画」-「組織化」-「経営」-

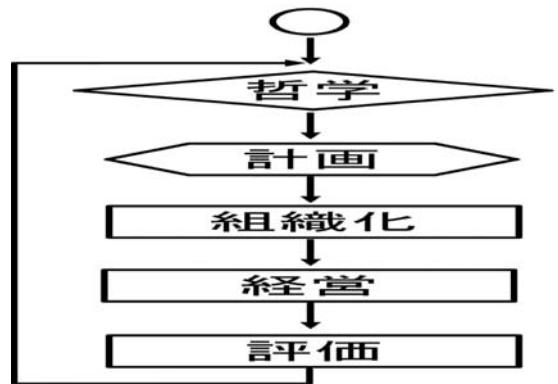


図1 久保のコーチング回路

「評価」という循環回路であり、コーチングのプロセスを一連の流れとしてマネジメントサイクルで示したものである。コーチング実践において「哲学」から始まり、「哲学」に基づいた実践かどうか最後の「評価」で確認され、再び「哲学」に戻り実践しようとするのがこの「コーチング回路」という概念装置の特徴である。久保はコーチング実践のプロセスが「哲学」をもった行為として作動し、循環回路として「哲学」に戻っていかなければならないとしている。

図1 久保のコーチング回路

- 2) 久保正秋 (1994) コーチングの全体の場の検討, 体育原理研究第25号, p.2.
- 3) 久保正秋 (1998) コーチング論序説－運動部活動における「指導」概念の研究－, 不昧堂出版, P.42.
- 4) 久保正秋 (1994) 前掲書, p.42.
- 5) 桑子敏雄 (1999) 環境の哲学, 講談社学術文庫, p.108.
- 6) 桑子敏雄 (2001) 感性の哲学, 日本放送出版協会, p.196.
- 7) 桑子敏雄 (1999) 前掲書, p.30.
- 8) 桑子敏雄 (1999) 前掲書, p.22.
- 9) 桑子敏雄 (1999) 前掲書, p.32.
- 10) 桑子敏雄 (2005) 風景の中の環境哲学, 東京大学出版会, p.168.
- 11) 桑子敏雄 (2005) 前掲書, p.152.
- 12) 桑子敏雄 (2005) 前掲書, p.152.

- 13) 桑子敏雄 (2005) 前掲書, p.154. 方, 東海大学出版会, p.260.
- 14) 久保正秋 (2010) 体育・スポーツの哲学的見